



# 日本植物分類学会 ニュースレター

No. 34

Aug. 2009

## 目 次

### 諸報告

2009年度野外研修会実施報告 .....	2
2009年度植物分類学会野外研修会の感想 .....	3
庶務報告（2009年5月～7月） .....	5

### お知らせ

2009年度日本植物分類学会賞（学会賞および奨励賞）の受賞候補者の募集 .....	5
評議員会開催のお知らせ .....	6
臨時総会のお知らせ .....	6
植物分類学関連学会連絡会共催シンポジウム	
「植物と菌の創り出した多様な共生網—地中から天空まで」のご案内 .....	6
日・韓・中・植物分類学合同シンポジウムのお知らせ .....	7
2009年度日本植物分類学会講演会のお知らせ .....	7
日本植物分類学会第9回大会（2010年）のお知らせ .....	8
第10回大会開催地の募集 .....	8
2009年度福武学術文化振興財団助成事業のお知らせ .....	8
「第13回尾瀬賞」募集のお知らせ .....	9
「第31回（2009年度）沖縄研究奨励賞」募集のお知らせ .....	9
Acta Phytotaxonomica et Geobotanica 60(2) 発行の遅れについて .....	9
「小野蘭山没後二百年記念事業」募金のお願いについて .....	10
大阪市立大学理学部附属植物園園長（教授）の公募 .....	10

### 寄稿

学名のラテン語（2） .....	11
データベース化の勧め .....	12

### 研究での失敗談

研究への道の始まり .....	13
-----------------	----

### いきもの便り

性を捨てた地味なシダたち .....	14
--------------------	----

会員消息 .....	16
------------	----

## 諸報告

## 2009 年度野外研修会実施報告

田中 伸幸（高知県立牧野植物園）

今年度の野外研修会は、「瓶が森周辺および錦山のツツジと土佐の植物」と題して5月15日（金）～17日（日）の3日間、ツツジ類の観察を中心に高知県吾川郡の瓶が森および高岡郡日高村の錦山で行った。この辺りの植物に詳しい稲垣典年さんに案内していただいた。参加者は、当初21名の予定であったが、ご都合により3名の方がキャンセルされたため、18名であった。

第1日目（5月15日）は、リニューアルしたJR高知駅に集合した。高知駅の新しい駅舎は、牧野植物園と同じ建築家が設計したものである。参加者は、北は北海道、南は九州から集まった。名古屋便が少々遅延したが、態勢に影響はなかった。全員揃ったところで、県内有数の蛇紋岩地として有名な高岡郡日高村の錦山へと向かった。当初、バスを借りることも考えたが、非常に高額だったため、事前に参加者に自家用車への分乗をお願いし、車5台に分乗した。国道194号線を仁淀川沿いに西へ進み、途中、沈下橋を渡って錦山へ向かった。山は、高知市内から1時間ほどの所であって近くにはゴルフ場もあるが、自然豊かな地である。ドウダンツツジの群生地であるが、花には残念ながら少々時期が遅かった。カザグルマの大輪の花がひっそりと咲いていた。ニシキコバノミツバツツジも花の時期ではなかったが、基準産地の植物ということで、参加者の印象に残った植物の一つと思う。他にノアザミ、マルバウツギ、ホオノキ、

シライトソウ、タチドコロ、ヤチマタイカリソウ、シュンジュギク、カインササラサドウダン、コックバネウツギ、ヤマカシュウ、アオヒゲスゲ、タキユリ、カマツカなどが観察できたほか、自生のトサミズキが観察できた。参加者の多くは、蛇紋岩地の植物の形態に関東の同種の形態と比較しながら観察されていた。駐車場で標本の整理をした後、帰りは妹背峠を通り車窓から植物を観察しながら高知市内へと戻った。その晩は、高知市大橋通近くの路地にある割烹「ときわ」で懇親会を開いた。高知スタイルの非常に小さく狭い店だが、高知ならではの料理の数々にお酒もすすんで様々な話で盛り上がった。

第2日目（5月16日）は、国道194号線を寒風山まで進み、村道瓶が森線を伊予富士、東黒森、自念子の頭を通り、瓶が森へ向かった。途中、道沿いの崖に自生するアケボノツツジの美しい桃色の花を観察しながら何方か車を駐めて林道沿いの植物を観察した。アケボノツツジの他、フモトスミレ、シハイスミレ、トサノミツバツツジ、シコクハタザオ、ニガイチゴ、ナンゴクミネカエデ、ナンゴクガイソウなどを見ながら、瓶が森の駐車場に到着。そこで、昼食となった。冷たい雨に降られながら瓶が森へと登ったが、途中、満開のイシツチザクラに参加者のテンションが上がる。瓶が森の山頂までリンドウ、シコクシラベ、ミヤマイワスゲ、ヒナスゲ、ショウジョウスゲ、ヒメイチゲ、ウラジロモミ、ヒメコマツ、ヒ



図1. 錦山でトサミズキの自生を観察する参加者。



図2. 村道瓶が森線沿いに見られたアケボノツツジ。

ノキ、ショウジョウバカマ、タチツボスミレ、モリイバラ、ヤブウツギ、ミツパテンナンショウなどを見ることが出来た。その日は、山荘「しらす」に宿泊した。

第3日目(5月17日)は、山荘「しらす」から県道40号線を下り、長沢ダムを經由して194号線に戻った。途中、越裏門にある野草を育てている農家民宿で庭を見学させていただき、キレンゲショウマなどを見た。ここのご主人は、以前の山荘しらすの支配人で、現在は、いの町の観光協会会長をしておられるそうである。庭には種子から育てた野草が沢山育っていた。県道40号線沿いでは、コンロンソウ、ヒメシャラ、オオバメギ、ツルギミツバツツジ、オンツツジ、ワチガイソウ



図3. 1896mの瓶が森山頂にて。(五百川裕氏提供)

などが見られた。さらに、白猪谷の吉野川沿いでキシツツジを観察した。白猪谷ではキシツツジのほか、カンスゲ、コカンスゲ、オウギカズラ、コツクバネウツギ、コガクウツギ、イワイタチシダなどが観察できた。その後、高知市内へ戻り、牧野植物園のレストラン「アルブル」で昼食を摂った後、植物園のハーバリウム、牧野文庫を見学した。また、昨年に開園50周年にリニューアルした南園を植物観察しながら散策した。牧野植物園の展示大温室は、ちょうどこの研修会の日が最後の公開日だった。温室内では、ビルマの半島部テナッセリムで発見されたマメ科のアムヘルスティア・ノビリス(*Amherstia nobilis* Wall.)の美しい花が、温室最後の日の風景を彩っていた。築39年の温室は、老朽化が進んでおり、この日を最後に現在建て直しの工事が行われている。新型温室は、さらに面積を拡張し、来年に完成予定である。牧野植物園見学後、午後3時半に解散となった。

本研修会参加者は以下の通りである(敬称略、五十音順): 五百川 裕, 稲垣 典年, 宇那木 隆, 大宮 徹, 織田 聰, 織田 二郎, 川端 弘子, 黒沢 高秀, 古賀 佳好, 須賀 瑛文, 田中 伸幸, 永益 英敏, 中村 兪雄, 中村 建爾, 夏井 操, 橋本 光政, 藤井 伸二, 吉田 國二。

## 2009年度植物分類学会野外研修会の感想

橋本 光政 (姫路市)

まず整備されて近代的なJR高知駅に集合。牧野植物園の田中伸幸さんの挨拶と説明を受け、早速蛇紋岩植物で知られる錦山に向かった。国道194号を走り、途中で仁淀川の沈下橋を渡って山域に入った。道案内や植物案内に植物園の稲垣さんにも協力いただき、ポイントで止まりながら説明を受けることができた。

錦山山麓にはまず特徴的なトサミズキが点在し、実生も道端にたくさん生えていた。同時に錦山が基準産地というニシキコバノミツバツツジ、ヒロハドウダンツツジがほぼ山頂近くまで続いていた。前者は葉が3cm以下と小さく表面に黄色の伏毛をもち裏面無毛で蛇紋岩特有という。後者も現在国内唯一の自生

地という。秋には見事な紅葉が見られ錦山の名の起こりともいう。その他蛇紋岩地らしくシライトソウ、シュンジュギク、コツクバネウツギ、ヤブイバラなど全てが小さく萎縮した感じであった。スダレギボウシ、ヤチマタイカリソウ、カザグルマなどもみられ豊かな自然の一面をうかがうことができ、良いところを案内していただいたとまず感謝の初日であった。

また、その夜の夕食がはりまや橋を渡って望んだ小路の二階が今もって忘れない。少々小狭であったが、海辺の土佐ならではの食膳が、出されてくるたびに感動のものであった。お酒も弾み各自の話も大いに盛り上がり、北海道から九州までの参加者全員が南国土佐の

夜を楽しむことができた。

二日目も車に分乗し稲垣さん先導で瓶が森へ向かった。633 美の里・道の駅で各自思い思いの弁当を買うことになっていたが、“633 美”に皆の関心が集まった。第一にその読み、そしてそのいわれに他ならぬ論議が集中した。正解は“むささび”，及び国道“194+439”号線の交点であった。

寒風山峠茶屋で小休止後、いよいよほぼ尾根伝いの瓶が森林道に入った。見上げる岩の隆々とした山塊にはアケボノツツジのピンクが目にはいる。林道沿いにもトサノミツバツツジが鮮やかな色で迎えてくれた。シロモジ、ミツパテンナンショウ、フモトスミレ、シコクスミレ、ヤマヤナギ、ミヤマニガイチゴ、シコクハタザオと花が続く。見上げていたアケボノツツジも道端に出てきた。ナンゴクミネカエデ、コヨウラクツツジと四国の亜高山ならではの植物に心も高鳴り、瓶が森の駐車場に着いた。

小雨混じりの寒風が冷たい。腹ごしらえをして、雨具を身にまとい記念写真を撮って登山の開始となった。しばらく登ると岩峰が見え稲垣さんの説明にあった通りのイシヅチザクラが咲いていた。南国土佐において六月の桜であった。それぞれ思い思いのアングルを決めてシャッター音の連写が続いた。更に、男山～女山と冷たい風と濃霧の中となったが、みんなカメラを雨滴から守りながら四国独特の植相を楽しみつつ歩いた。時々雲間が開き石鎚山の山塊がくっきりと浮かび上がった。山頂部ではまだ蕾の堅いものもあったがシコクシラベ、ダケカンバの変種アカカ



図1. 瓶が森に登る前に撮影した集合写真。瓶が森駐車場にて。

ンバ、ヒナスゲ、ツルキンバイ、ツルギミツバツツジ、コメツツジ、バイケイソウ、マイズルソウ、オオダイトウヒレン、ヒメイチゲ、イヨフウロ等々 1500m を超す四国の山塊ならではの種の生態を見せていただいた。駐車場にそろった時は天候はもうひとつではあったがみんな満足しきったとって良い顔をしていた。

宿は少し下がって、山荘しらす。外は豪雨が屋根を叩き続けていたが、ストーブの焚かれたホール兼食堂で今日の山での観察や各自のテーマなど話は昨夜に続いて絶えることはなかった。

三日目、ほぼ雨は上がっていた。地元の登山大会が計画されていたが、昨夜の雨で中止となり、看板撤去などの役員は見たが一般客はなく、下山ルートでも落ち着いて車窓からの眺めを楽しみつつ下れた。途中ツルギミツバツツジの満開株下で止まるとワチガイソウが咲いていた。また、白猪谷（しらいだに）で小休止と入り口の探索に入り、オウギカズラ、クサヤツデ、キシツツジなどを写真に納めた後、一路牧野植物園に向かった。長沢ダム付近ではオンツツジが四国ならではの光景をつくって見送ってくれた。

植物園の食堂で昼食後、田中伸幸さんの案内で園内や館内、特に牧野文庫と標本庫の中



図2. 牧野植物園のハーバリウムを見学する参加者。

も詳しく解説いただき、文庫も標本も新しいシステムの下に大切に維持管理され、とても利用しやすく工夫されていることに深い感銘を受けた。今日限りで改築に入るといふ熱帯温室を楽しんだ後解散となった。本当に楽しかった勉強になった野外研修でした。買い求めた「高知県植物誌」も牧野さんの線画入りのTシャツも見事なできばえで愛用させていただいている。

最後に、三日間お世話いただいた牧野植物園の田中伸幸さんはじめ、稲垣さんや夏井さん、そして学会の役員の方々の進行に感謝して筆を置きます。



図3. 牧野植物園の展示温室内に咲いていたアムヘルスティア・ノビリスを観察する参加者。この日は旧温室最後の公開日だった。(五百川裕氏提供)

## 庶務報告 (2009年5月～7月)

庶務幹事 東浩司

庶務報告では学会が交わした契約、転載許可、連絡、行った会議などで、ニュースレターの他の記事で紹介されていないものをお知らせしています。

- ・世界植物保全戦略日本版レビューのワーキンググループの委員に絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会委員長の角野康郎氏を推薦した(6月9日)。

## お知らせ

### 2009年度日本植物分類学会賞

### (学会賞および奨励賞)の受賞候補者の募集

学会賞選考委員長 村上哲明

以下の2つの賞の受賞候補者を募集します。自薦、他薦を問わず、会員の皆様の積極的な応募・推薦を期待しております。

「日本植物分類学会賞」：植物分類学および日本植物分類学会の発展に特に顕著な貢献が認められたものに授与する。受賞者の資格は、「日本植物分類学会賞」については10年以上継続して本会会員である者とする。

「日本植物分類学会奨励賞」：受賞年の4月1日において満38歳以下で、優れた研究業績をあげた将来有望な研究者(学生を含む)に授与する。受賞者の資格は3年以上連続して本会会員であり、主要な研究業績の一部を本会の大会または雑誌に発表している者とする。

#### 募集要領

他薦の場合は、推薦する候補者の氏名と推薦理由、どちらの賞に推薦するかをお知らせください。自薦の場合は、(1)どちらの賞への応募か(2)略歴(生年月日、学歴、職歴など)(3)調査・業績の概要(4)業績リスト(論文、著書など)と本学会の大会での発表記録をワード・ファイルあるいはA4用紙に記入して(書式は自由)お送りください。自薦、他薦を問わず、さらに必要な資料があれば、学会賞選考委員会から候補者の方に提出を依頼します。応募・推薦は、e-mailまたは郵便でお願いします。

- ・書類送付先：〒192-0397 八王子市南大沢1-1 首都大学東京 牧野標本館  
村上哲明宛 e-mail: nmurak@tmu.ac.jp
- ・応募・推薦の締め切り日：平成21年9月30日
- ・その他：両賞の受賞者は平成22年春の日本植物分類学会大会において表彰されます。また、同大会において受賞講演を行っていただくことを原則としております。

## 評議員会開催のお知らせ

---

庶務幹事 東浩司

下記の通り評議員会を開催します。評議員、幹事会等の関係各位の出席をお願いします。なお、この日は会場の山形大学小白川キャンパスにおいて日本植物学会第73回大会が開催されております。

日時：2009年9月19日（土）12時00分～12時45分

会場：山形大学小白川キャンパス教養教育1号館E会場（131号室）

審議事項等についてご意見、ご希望などがございましたら、評議員、会長、幹事、各委員会委員長のいずれかにお伝えください。

## 臨時総会のお知らせ

---

庶務幹事 東浩司

下記の通り臨時総会を開催します。会員の皆様にはご参集いただきますようよろしくお願いいたします。なお、この日は会場の山形大学小白川キャンパスにおいて日本植物学会第73回大会が開催されております。

日時：2009年9月19日（土）12時50分～13時00分

会場：山形大学小白川キャンパス教養教育1号館E会場（131号室）

議題：2009-2010年度監事候補の承認について

## 植物分類学関連学会連絡会共催シンポジウム

### 「植物と菌の創り出した多様な共生網—地中から天空まで」のご案内

遊川知久（国立科学博物館）

植物分類学関連学会連絡会は、例年、植物学会大会において共催シンポジウムを開催しています。2009年度は9月20日（日曜）に山形大学において、下記のシンポジウムを開催する予定です。ぜひご参加下さい。

開催趣旨：菌類（きのこ・カビ・酵母）は自然界の中では生物遺体の分解者として知られる。菌類のこのような生き方は「腐生」として知られ、物質の循環に寄与している。しかし、菌類は分解にとどまらず、様々の生きた生物と相互作用を営んでおり、この関係は「寄生」や「共生」として知られている。このシンポジウムでは、とりわけ多様な菌類と植物の関係に注目し、地下から地上、はては天空に展開される多様な関係を総説し、菌類と植物の多様な関係を紹介する。

場所：日本植物学会第73回大会（山形大学小白川キャンパス・山形市小白川町1-4-12）

交通案内：<http://www.yamagata-u.ac.jp/jpn/you/modules/common14/index.php?id=4>

日時・会場：9月20日（日）9:00-12:00 B会場

## プログラム

1. 「植物・菌類がつくる共生ネットワーク（共生網）の多様性と進化」：細矢 剛（国立科学博物館・植物研究部）
2. 「植物の定着と遷移に不可欠な菌根菌のネットワーク」：奈良 一秀（東京大学・アジア生物資源環境研究センター）
3. 「植物とさまざまな関わる菌類：内生菌（エンドファイト）にもなりうる病原菌，腐生菌」：岡根 泉（製品評価技術基盤機構）
4. 「菌と藻の共生体『地衣類』の秘密は天空にある！？—大気中に浮遊する藻類からの考察—」：半田 信司（広島県環境保健協会）・大村 嘉人（国立科学博物館・植物研究部）
5. 「なぜラン科は多様なのか—菌根菌パートナーのシフトがもたらしたランの生活形と栄養摂取様式の進化」：遊川 知久・辻田 有紀・堤 千絵（国立科学博物館・植物研究部）・横山 潤（山形大学・理学部）

## 日・韓・中・植物分類学合同シンポジウムのお知らせ

日本植物学会選出組織委員 瀬戸口 浩章， 邑田 仁， 綿野 泰行

日・韓・中 3 国持ち回りで開催することになった植物分類学合同国際シンポジウムは，第 1 回を日本で担当し，昨年 8 月に札幌で開催しました。今年，第 2 回は 10 月 22-23 日に中国（北京）で開催されます。テーマは昨年と同様「East Asian Plant Diversity and Conservation」です。現在，植物分類学会のホームページでサーキュラーを公開しています（参加費は 75 米ドルです）。できるだけ多く参加してシンポジウムを盛り上げるにより 3 国の協力関係を発展させていきたいと考えますので，積極的な参加をお願いします。発表される方は 9 月 20 日がアブストラクトのメットですが，なるべく早く参加申し込みをして，安心させてあげてください。

## 2009 年度日本植物分類学会講演会のお知らせ

講演会担当委員 篠原 渉

平成 21 年度の日本植物分類学会講演会は，大阪学院大学の林一彦先生に会場をお世話頂いて，次のとおり開催します。演題など詳細につきましては次号のニュースレター（No. 35）でご案内いたします。

【日時】2009 年 12 月 5 日（土）午前 10 時～午後 4 時 40 分

【講演会場】大阪学院大学 2 号館地下 1 階 2 号教室（02-B1-02 教室）

〒564-8511 大阪府吹田市岸辺南 2 丁目 36 番 1 号（電話：06-6381-8434）

【会場までのアクセス】

JR 東海道本線岸辺駅，阪急京都線正雀駅から大阪学院大学までともに徒歩 5 分。

[http://www.osaka-gu.ac.jp/p\\_student/index.html](http://www.osaka-gu.ac.jp/p_student/index.html) の「交通アクセス」と「キャンパスマップ」をご覧ください。

【予定講演者】

秋山 弘之，海老原 淳，厚井 聡，佐藤 博俊，田村 実

ニュースレターへの情報提供，寄稿大歓迎です。ご連絡は下記まで。

東 隆行 〒060-0003 札幌市中央区北 3 条西 8 北海道大学植物園

TEL: 011-221-0066 FAX: 011-221-0664 e-mail: azuma@fsc.hokudai.ac.jp

## 日本植物分類学会第9回大会（2010年）のお知らせ

庶務幹事 東浩司

日本植物分類学会第9回大会は以下の通り開催する予定です。なお、大会の詳細および参加申し込み等のご案内は、次号のニュースレター（11月号）でお知らせします。

1. 会場 愛知教育大学 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1
2. 日程 3月25日（木）各種委員会，評議員会  
3月26日（金）～27日（土）講演，総会，懇親会など  
3月28日（日）講演またはエクスカージョン，公開シンポジウム

## 第10回大会開催地の募集

庶務幹事 東浩司

すでにニュースレター33号（5月号）でお知らせしましたが，日本植物分類学会第10回大会（2011年）の開催地を募集しています。大会開催をお引き受け下さる（あるいは場合によっては引き受けても良い）という会員の方がおられましたら，庶務幹事宛（下記）にご連絡をお願いいたします。

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町  
京都大学大学院理学研究科生物科学専攻 植物学系植物系統分類学内  
日本植物分類学会事務局（庶務幹事 東浩司）  
TEL & FAX : 075-753-4125 e-mail : jimmu@e-jsps.com

## 2009年度福武学術文化振興財団助成事業のお知らせ

庶務幹事 東浩司

福武学術文化振興財団より研究助成事業への応募の案内が届きました。詳細については，各問い合わせ先またはホームページをご覧ください。

### ＜歴史学・地理学助成＞

対象：歴史学，地理学，および歴史学・地理学の融合された分野における「研究」や「学会，研究集会の開催」

募集期間：8月20日～9月18日（消印有効）

### ＜次世代歴史・地理教育支援助成＞

対象：歴史，地理分野における教育，学習活動に対しての支援助成

募集期間：8月20日～9月18日（消印有効）

### ＜瀬戸内海文化研究・活動支援助成＞

対象：地域の固有性と多様性を持って持続的な発展をとげてきた瀬戸内海地域の文化力の向上と地域づくりに貢献する「調査・研究」，「活動」，「学会等の開催」

募集期間：8月1日～9月30日（消印有効）

問い合わせ先：財団法人福武学術文化振興財団事務局 〒206-8686 東京都多摩市落合1-34  
TEL 042-356-0810 HP：<http://www.fukutake.or.jp/science/top/>

**「第 13 回尾瀬賞」募集のお知らせ**

庶務幹事 東 浩司

尾瀬保護財団より「第 13 回尾瀬賞」募集の案内が届きました。詳細については以下の問い合わせ先またはホームページをご覧ください。

賞の種類：選考の主たる対象は尾瀬賞。ただし将来性のある若手研究者には尾瀬奨励賞を授与することがある。

候補者の対象・資格：応募者は湿原の保全に関わる基礎研究において優れた業績を上げ、今後の研究の深化が期待される個人またはグループ。

募集期間：2009 (平成 21) 年 4 月 1 日～10 月 31 日 (消印有効)

問い合わせ先：財団法人尾瀬保護財団事務局「尾瀬賞」係

〒 371-8570 群馬県前橋市大手町一丁目 1-1 群馬県庁内

電話：027-220-4431, ファックス：027-220-4421

Eメール：info@oze-fnd.or.jp

尾瀬保護財団ホームページ：<http://www.oze-fnd.or.jp/>

**「第 31 回 (2009 年度) 沖縄研究奨励賞」募集のお知らせ**

庶務幹事 東 浩司

沖縄協会より上記奨励賞募集のお知らせが届きました。応募資格に学協会等の推薦が必要とされており、つきましては、日本植物分類学会からの推薦を希望される場合は早めに庶務幹事までご連絡下さい。詳細については以下の問い合わせ先またはホームページをご覧ください。

応募期間：平成 21 年 7 月 15 日～9 月 30 日 (消印有効)

応募資格：

- (1) 沖縄を対象とした優れた研究を行っている
- (2) 50 歳以下の研究者
- (3) 学協会、大学、研究機関または実績のある研究者から推薦を受けた者。出身地および国籍は問わない

問い合わせ先

財団法人沖縄協会 〒 112-0004 東京都文京区後楽 1-2-9 エー・ゼットキュウビル 5F

(財) 沖縄協会 「沖縄奨励賞」 担当：山岸 貴生

TEL：03-5803-2341 FAX：03-5803-2581

E-mail：okinawakyoukai@nifty.com

HP：<http://homepage3.nifty.com/okinawakyoukai/>

**Acta Phytotaxonomica et Geobotanica 60(2) 発行の遅れについて**

編集委員長 永益 英敏

7 月発行予定の英文誌 Acta Phytotaxonomica et Geobotanica 60(2) 号の発行が遅れており、ご迷惑をかけております。直接の原因は掲載予定論文の審査状況によるものですが、基本的には慢性的な原稿不足が原因です。特に今年度の投稿数はかなり少なく、60(3) 号についても年内発行がきわめて難しい状況となっています。会員の皆様の積極的な投稿をお願いいたします。夏休みに入り、長期の海外調査等にでかけられる方々も多く、審査は遅れ気味です。60(2) 号の発行は、早くても 9 月末にずれこむ見込みです。

**「小野蘭山没後二百年記念事業」募金のお願いについて**

邑田 仁 (東京大学)

2010年は日本のリンネといわれた小野蘭山の没後200年にあたります。蘭山の業績を再発掘して顕彰するため、小野蘭山没後二百年記念事業を計画し、実施のための募金を行っています。ホームページに趣意書を掲載しました(2009.7.29)ので、これをご覧のうえご協力いただきますようぜひともよろしくお願いたします。ご協力いただいた方には記念誌をさしあげます。なお、ホームページをご覧になれない方、ご質問のある方は下記にご連絡ください。資料をお送りします。

連絡先 〒112-0001 東京都文京区白山3丁目7番1号  
東京大学大学院理学系研究科附属植物園内  
小野蘭山没後二百年記念事業準備会(邑田 仁)  
TEL 03-3814-2625 e-mail: ranzan@ns.bg.s.u-tokyo.ac.jp

**大阪市立大学理学部附属植物園園長(教授)の公募**

岡田 博 (大阪市立大学)

理学部附属植物園長の退任に伴い、後任園長(教授)を公募します。2010年4月より理学研究科生物地球系専攻の自然誌機能生物学講座に所属していただきます。植物学の研究分野を専門とし、下記の職務遂行に十分な能力と熱意をお持ちの方はぜひご応募ください。

## 仕事内容

- 1) 理学部附属植物園の管理・運営(社会貢献を含む)
- 2) 植物学、および植物園を利用した研究
- 3) 講義、および学生(学部、大学院前期・後期博士課程)の研究指導

募集期間: 2009年10月9日(金)まで(提出書類は必着)

## 応募書類

- ・履歴書 1部
- ・業績目録 1部(I. 原著論文、II. 著書、III. 総説、IV. その他、の各カテゴリーに分けて記入すること。業績目録には、主要な業績として、原著論文10編以内、著書3編以内、総説3編以内に丸印をつけて指定して下さい。)
- ・上記の主要な業績の別刷各一部(コピーも可)
- ・教育研究活動等に関する資料(1999年以降)
  - ① 学生の研究指導歴
  - ② 研究助成金の取得状況
  - ③ 研究集会における招待講演やセッションオーガナイザーなど
  - ④ 学会活動など(会長・評議員・編集委員・論文審査員など)
  - ⑤ 社会貢献活動
  - ⑥ その他特記事項
- ・現在までの研究概要と今後の研究計画(主要論文と関連づけて3000字程度)
- ・植物園をどのように発展させるかに関する構想(本人の貢献と関連づけて2000字程度)
- ・推薦書(自薦の場合は不要)

- ・問い合わせ可能な方 2 名の氏名と連絡先（所属・職名・住所・電話番号・メールアドレスを明記）

連絡および送付先

〒 558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138 大阪市立大学大学院理学研究科  
生物学科主任 宮田 真人 Tel: 06-6605-3157 E-mail: miyata@sci.osaka-cu.ac.jp

- ・送付用封筒の表に「園長応募」と朱記し、簡易書留郵便にてご送付ください。
- ・選考にあたり、セミナー等をお願いすることがあります。
- ・採用後の勤務や給与等に関する条件については、公立大学法人大阪市立大学の定める規程によります。
- ・応募書類は採用審査の目的のみに使用し、他の目的には一切使用いたしません。

詳しくは以下のホームページをご参照ください。

<http://www.osaka-cu.ac.jp/index.html>

<http://www.sci.osaka-cu.ac.jp/grad/BIOGEO/index.html>

<http://www.sci.osaka-cu.ac.jp/biol/index.html>

<http://www.sci.osaka-cu.ac.jp/biol/botan/>

## 寄稿

### 学名のラテン語 (2)

永益 英敏 (京都大学)

学名がラテン語であることは前回述べた。今回はその形式についてみてみよう。

学名は二語名だけではない

学名といえば二語名（二名法名，二語法名ともいう）と思い込んでいる人もいるようだが、ちょっと考えればじつはそうではないことはすぐにわかる。たとえば科の学名は一語名であるし、種内分類群の学名は三語名である。種の学名は二語名で表されるが、もう一つ、属の下位区分（属と種の間ランク）の学名も二語名である。属の学名と、それより上のランクの学名はすべて一語名で表される。

亜属の学名が二語名で亜科は一語名？ そうなのである。亜属の学名は「属名」+「属の下位区分の形容語」の 2 語からなっていて（ランクを示す連結辞は学名の一部ではない [第 21 条付記 1]）属名から後者のみを切り離せないが、亜科の学名は「亜科名」1 語のみからなっていてランクを示す語も必要ない。この両者は形式的に全く異なることに注意しておく必要がある。

属名は単数形，属より上位のランクの学名は複数形

さて，ラテン語である。ラテン語は印欧語族に属する屈折語で，名詞には性(男性, 女性, 中性)，数(単数, 複数)，格(主格, 属格, 対格, 与格, 奪格, 呼格)がある。

一語名のうち，属名は「主格単数の名詞またはそのように扱われる 1 単語 (第 20.1 条)」だが，属より上位のランクの学名は複数形である。科と科の下位区分の学名は「名詞として用いられる 1 つの複数形の形容詞である (第 18 条, 第 19 条)」。科より上位のランクの学名は「複数形の名詞として扱われ (第 16.1 条)」と表現が違うが，それは本来の名詞と形容詞がまざっ

ているからである。「名詞として用いられる形容詞」とはわかりにくい表現だが、これについては次回説明しよう。

属より上の分類群の学名が形式的に複数形であるため、科の学名を主語とする場合、英語の文でも 'The Ericaceae are ...' と複数形の動詞で受ける。ただし、単数の family をつければ 'The family Ericaceae is ...' と動詞も単数形になることに注意しよう。

生物の多様性と進化を考える上では「種」が基本となる単位であろうが、この学名の形式をみると、学名は属が基本となっていることがわかる。属名は1語からなる単数名詞であり、それより上位のランクの分類群は属名に基づいた複数形の1語で表現され（ただし、科より上位の分類群には属名に基づかない特徴名も認められている [第 16.1 条]）、属より下位は属名に形容語をつけて区別するわけである。

表. 学名の形式

ランク	形式
属より上位の分類群	一語名 複数形
属	一語名 単数形
属の下位区分	二語名 属名+*属の下位区分の形容語
種	二語名 属名+種の形容語
種内分類群	三語名 属名+種の形容語+*種内分類群の形容語 (=種名+*種内分類群の形容語)

\*ランクを示す連結辞を加える

## データベース化の勧め

秋葉 由紀彦 (東京都文京区)

私は長らくベトナム戦争史に関わっている歴史畑の者ですが、趣味で花の撮影をしていたところ、昨年からハナイバナに似ているものや、キランソウ属の何だかわからないものなどを見つけてしまったために、このたび当会に入会させて頂きました。

老いてからパソコンが普及し、「若い頃にこれがあれば楽だったのに」と悔しがることに、データベース化があります。既にやられている方は多いと思いますが、まだの方のために書かせて頂きます。

データベース化には、カード型とリレーショナル型等があるそうですが、私は簡単なカード型でおこなっています。ソフトにはファイルメーカー Pro やエクセルが有名でしょう。

最初に入力する項目を決めて、基本となるレコード(フォーマット)を作り、あとは新規レコードに入力していただくだけです。項目に「ふりがな」や「英名」等を設けておけば、50音順やアルファベット順に並びかえることも可能です。用語集の作成であれば、自分用の辞書を作ることが可能となります。一番便利に感じているのは、任意の文字を検索できることです。

私が作成中のものをいくつか例に致します。( )の中が項目です。

「蔵書目録」(書名/編著者名/発行元/発行年)

「用語集」(単語/その意味/ふりがな/出所)

「撮影記録」(花名/撮影日)

「植物学名」(学名/和名/越名/出所)

項目にある「出所(出典)」はどこからその内容を得たかを、あとで確認する時に必要とな

ります。「植物学名」に「出所」があると、調べたい植物が、どの図鑑に掲載されているか、網羅できます。

「撮影記録」はデジタルカメラで撮影した写真を、CD等に保存しているのですが、任意のものを探す時に便利です。撮影したものを、パソコンに移す時点で、こまめにデータベース化もおこないます。

「植物学名」は、知人のベトナム語学者から「生物名がわからなくて困っている」と言われたことから、日本とベトナムの図鑑で、学名を照らし合わせれば、和名に変換できることに気がつき、それで始めました。哺乳類・鳥類の学名検索図鑑はいくつかあり、それらで7割くらいの和名変換が可能ですが、植物のものは見つけれなかったため、自分で作成することにしました。

現在、7万レコードを入力しましたが、未入力の図鑑が10冊以上控えており、先は見えていません。7万といっても、「Koidzumi」を「Koidz.」と略の違いのものも、別物として入力していますので、数的にはたいしたことはありません。まだ手をつけていないキノコも、植物として入力する予定です。また、市販で入手できる図鑑からおこなっていますので、専門家が使用するには物足りないものでしょう。何と言っても植物学者のためではなく、語学者のために始めたことですから。項目に「英名」を設けなかったことを、少々悔やんでいます。

入力していて気がついたのですが、日本の学名の系統等が、他の国のものと違う場合もあり、日本のだけでは世界のものに通用しないような気がしています。ベトナムの図鑑に、ツルマオそっくりな写真が掲載されていたのですが、その学名「*Memoralis hirta*」は、『中国有用植物図鑑』（村上孝夫監修／廣川書店／1991年発行）にしか掲載されておらず、本書にあたるまで、ツルマオと確認できませんでした。

以上、何らかの御参考になれば幸いです。

## 研究での失敗談

### 研究への道の始まり

高橋 英樹（北海道大学）

研究での失敗は大小さまざまあるが、これはもう30年以上も前の研究の道に入る頃の恥ずかしい記憶である。ここでは「失敗談」を広義に解釈して、昔の恥ずかしい話を白状して、こんな人間でも研究者社会の端っこで生きていけることを示し、若手研究者に希望を与えることで、このシリーズを短命で終わらせないようにしよう、とするものである。

その頃私は東北大理学部生物学科3年生に所属していた。4年生の研究室配属に際して、最初は浅虫の臨海実験所に行き海洋生物学を研究したい、と思っていた。高校生の頃にテレビで見たクストー船長の海洋番組に憧れた

事もある。しかしその年は何故か実験所への移行希望生が多く、諦めた。次に植物生態学研究室に行きたいと思った。その当時は第一次エコロジーブームだったと思う。ここも優秀な希望生が多く、諦めた。基本的に他人と争うことを好まなかったせいだと思う。結局、移行希望生の少ない植物分類学研究室に進んだ。思えば、植物分類学の授業のおりに「みんな先を急いでバスに乗りたがるが、ゆっくりと歩いて行くのもよいものですよ」と、ぼそっと言っていた菅谷教授の言葉がいやに耳に残ったせいもある。またそのころ助教授だった相馬さんは酒豪でいくらでも酒を飲ませてくれる、と先輩に聞いたこともある。植物分

類学研究室に配属されたのは私と就職希望の藤牧君の二人だった。

雪が溶けた4月頃だったろうか、特に分類学の知識があったわけでもない私は、それでもせつかく分類学研究室に入ったのだから野外採集でもしてみようと、理学部の裏山に一人で出かけた。人もいない山道に入っていくと、大変奇妙な植物が地面からいくつも出ている。あたかも小形のラフレシアのようである（その時はそのように見えた）。結局、ほとんど何もとらず研究室に戻って、お茶の時間にその件を皆に話した。助教授以下メンバーが打ちそろっていたが、全員ラフレシアに似た植物は思い浮かばない、との事だった。最後は、「いずれにしろ採集して現物を採ることが学問の第一歩だ」という話でその場は終わった。謎の植物が「フキノトウ」だった事はほどなく気が付いたのだが、その事を研究室のメンバーに白状したか、しなかったか、今となっては漠然として覚えていない。ただ分類素人の学生だった私であっても、それを知らなかったのは恥ずかしいことだと思ったのだろう。

菅谷さんはそろそろ定年だとの事で、結局相馬さんについた（そのころ東北大理学部生物学科では学生が先生の事を、さんづけで呼んでいた。時代なのか大学によるのか分からない）。相馬さんは噂に違わぬ酒豪で、よく飲ませてもらった。理学部は仙台市郊外の青葉山の上であり、研究室で飲んだ後、市内の飲み屋や相馬さんの自宅におじゃまして飲んでいた。「よい学者になるには良妻をもらっては

行けない。家に帰りたくなるようではよい研究ができない。」と盛んに言っていた。ただ相馬先生の場合どうだったのか、そして私の場合はどうなのか。どちらも良妻だったため大学者にはなれなかった、という事だろうか。相馬先生も奥さんも既に亡くなってしまったが、よき時代の思い出である。そして4年生で卒論を出した記憶がない。

実は大学に入ってからには京都大学の今西錦司に憧れ、京大の人類学研究を夢見ていた。人類学ゼミなどという同好会を勝手に作ったりしていた。そのため、大学院入試の頃は、このまま植物分類学をやるか思い切って人類学をやるか考えていた。インターネットもない当時、とにかく大学院入試の情報を集めようと、京都大学に行ってみた。そこで京大人類学の入試日程の貼り紙を見ると、東北大学の生物学科と同日程だった。二股入試して、どちらも受かったら人類学をやろうという私の思惑はずれた。結局、研究室を決めたときと同じく、一番興味を持っていた人類学は諦め、受かる可能性の高い東北大大学院の植物分類学へと進んだ訳である。奇遇にもこの時、東北大から京大の人類学科に進んだ同級生の川本芳君は、今、京大霊長類研究所でばりばり研究をしている。人生、恥と挫折の連続である。そんな私でも、何とか分類研究者の端っこで生きているのは、いろんな人に教えてもらったり助けてもらった故だろう。「一期一会」を大切にしよう、ともしっかり金言を最後に述べて、次号へとバトンタッチする。

## いきもの便り

### 性を捨てた地味なシダたち

山本 薫（首都大学東京）

「性の目的は何か？答えはあまりにも明瞭で陳腐に思えるほどである。しかし、もう一度、よく考え直してみると、そうでないことがわかるだろう。なぜ子どもを作るのに二人の人

間が必要なのか？なぜ三人でも一人でもないのか？何か理由が存在するのか？」—マット・リドレー『赤の女王 性とヒトの進化』（長谷川真理子訳）。

なぜ、多くの生物は有性生殖をするのでしょうか？—その答えはそんなに簡単にわかるはずはないけれども、シダ植物を材料にして、この進化生物学の大問題に少しずつでもアプローチできればと思いつつ私は研究に励んでいます。シダ植物には、二次的に有性生殖をするのをやめて、無配生殖をするものも少なからず存在します（熊本大の高宮先生によると日本産シダ植物の17%とのこと）。しかし、そのようなものにも遺伝的多様性はみられます。無配生殖を行ってクローン繁殖だけをしているはずのシダ植物が、どのように遺伝的多様性を獲得しているのか、そして、性の進化的存在意義が遺伝的多様性とどのように関係しているのかを考えることはとても興味深いです。

ただし、シダ植物というのはどうにも見た目の華やかさに欠けるようです。確かに、シダ植物は全身緑色で、普段、日の目をあまり見ることもなく、暗くじめじめした場所に生育しています。私は、そんなネガティブな雰囲気が健気でいじらしいと思うのです。しかし、私の研究材料であるベニシダ類はオシダ（雄シダ）科だけあって、多くの人に愛されるような繊細さや可愛らしさは持ち合わせていないシダのようです。被子植物を研究している方々からは、「どれも同じように見える」だの、「花が咲かないから綺麗ではない」だの、当然ながら「送粉昆虫もいないから面白くな



図1. 伊豆大島の二子山で採集した無配生殖型ベニシダ(右)と有性生殖型ハチジョウベニシダ(左)の孢子体(栽培個体)。(撮影：山本 薫)

い」と詰られることもしばしばあります。シダ植物を訪れる虫といえば、葉や胞子を食べるガやハチの幼虫か、ダニくらいですし…。

しかし、外見は地味でも、シダ植物にみられる現象はなんと派手でダイナミックなことでしょうか。倍数性は本当にいろいろ変わりますし、クローンでしか子孫を残す気がないようにみえた無配生殖型が、有性生殖型と積極的に交雑しようとするのです。無配生殖型ベニシダ類と、それに近縁な有性生殖型ハチジョウベニシダの混生集団の私の解析の結果からは、これらが自然界で交雑している可能性が示唆されました。また、人工交配実験を行った結果からは、無配生殖型(♂)と有性生殖型(♀)がかなり容易に交雑することが確認できています。私は現在までのところ、混生集団のみられる神奈川県逗子市の神武寺周辺と伊豆大島で調査をしていますが、無配生殖型の方が有性生殖型よりもはるかに効率よく個体数を増やすことができるためか、無配生殖型と有性生殖型の混生集団は非常に稀です。フィールドに立って思うのは、ここは無配生殖型と有性生殖型がまさに真正面から戦いを繰り広げている稀な場所である、ということです。このようなシダ植物達が性の進化的意義や意味を教えてくれるのかと思うと、神秘的な気持ちになるのです。



図2. 無配生殖型ベニシダ(♂)と有性生殖型ハチジョウベニシダ(♀)の人工交配によって生じたばかりの雑種の孢子体。(撮影：山本 薫)